



明るく日は好天気で楽しい旅を続けた。「この分では明るいうちに駒飼宿に着ける」と笹子峠を目指して登って行った。

その頃、麓の駒飼宿ではお百姓さんが可愛がっていたトチという利口な甲斐犬が、5日も前からどこへ行ったのか姿を消し見えなくなっていた。繋いでおくようにとおふれが出ていたのに、お百姓さんは探し回ったが見つからず、どうしたものかと思案していた。

一方、ムジナ僧は峠の頂上に着き一休みして峠を下り始めた。ところが峠に一番近い沢まで下ってくると、突然犬が管長さんに襲いかかりかみ殺してしまった。

他の2人のムジナ僧はびっくり仰天、命かながら麓の村へ逃げ村人に「建長寺の管長さんが峠で犬にかみ殺された」と告げて立ち去った。「さあ、てへんな事になった」と村中大騒ぎとなった。

村人が峠を目指して登っていくと、犬の鳴き声がするのでそばに近づくと二度びっくり。管長さんではなく、一匹の古いムジナがかみ殺されていた。「あーよかった」と胸を撫で下ろし、さすがに利口な犬だとほめたたえた。

この事件があつてから、村人はこの沢を「坊主の沢」と呼ぶようになった。残りの二人のムジナ僧のうち一人は、甲府の在の名主の家に泊まりご馳走になっていた。名主さんが「記念になにか書いて下さい」と頼むと、快く引き受け人払いをして「覗くな」と念を押し奥の座敷でなにやら書き始めた。見るなどと言われると見たいのが人情、襖の隙間から覗くと尻尾で何やら書いていたのでムジナだと見破り、飼い犬を放すとたちまちかみ殺されてしまった。もう一人のムジナ僧は、葦崎の常光寺に滞在していたが、甲府在の名主から「ムジナである」と注進があり、番犬を放すとたちまち退治されたということである。